

# 放射線災害・医科学研究拠点 第2回ふくしま県民公開大学の開催報告

福島県立医科大学 広報コミュニケーション室長 特命教授 松井史郎

## 【はじめに】

放射線災害・医科学研究拠点の取組みの一環として、私たちは、過去の教訓を活かし災害復興の在り方を導き出すと共に、新たな社会創生を探るという「復興学」の構築を目指しています。そのためには学術研究のみが独り歩きをすることなく、同時並行で社会のニーズを把握し、研究への理解、研究成果の共有等を図るための場も必要不可欠です。そこで設けられたのが「ふくしま県民公開大学」です。前年、第1回目は「県民公開大学」として、過去の原爆による放射線被害等からの復興に向けた取組みについて、広島や長崎の専門家による発表および意見交換を行い、これらの知見を福島県民の皆さんと共有しました。

それに続く第2回については、今度は復興の担い手である福島県民自身が復興の在り方について考えることを軸に企画が始まりました。なぜなら、震災後すでに7年もの時間が経ようとしていた時期であり、復興活動そのものへの「疲れ」や「飽き」がないか、改めて復興の先に何を掲げるかを明らかにしなければ、現在の復興活動も減速してしまうのではないかという問題意識があったからです。避難生活や復興活動が長引くのに伴い徐々に、現状で満足、あるいはこの程度で良いといった空気が福島の中に増しているようにも感じられたのです。がむしろに復興に取組んできたこれまでの歩みを振り返り、改めて復興の先に何を指すのか、そのために何が必要なのかを、その担い手自身が考えるタイミングではないかという思いから、この公開大学を県民自身が復興の向かう先を考える場にする、という方針が固まりました。

次に単に大きく県民全体を対象にするのでは焦点がぼやけることから、私たちが注目したのが県内の高校生、大学生でした。彼らこそが、今後の復興活動の担い手として中核的な存在であり、将来復興の成果を享受する当事者でもあるからです。彼ら自身が「自分ごと」として、復興の今後の在り方、その先に何を指し、求めるのかを考えることは、過去の教訓を活かし、新たな社会創生を模索するという「復興学」の狙いにも合致すると考えました。そこで、「ふくしま県民公開大学」の主たる対象者を福島県内の高校生、大学生とすることにしました。

プログラムについては、主な対象を高校生、大学生と若い層としたことから、大人たちが彼らをどこかに意識的に誘導したり、画一的な価値を押し付けることのないよう留意しました。むしろ、これまであまり接したことが無いであろう県外の視点から復興に対する様々な考えを提示することで、考え方や価値の多様性を知り、現在の復興の取組みを俯瞰し、考えることができるようなプログラムを組むことを心掛けました。

このような検討と議論の結果、第2回のふくしま県民公開大学のコンセプトを「これまでの復興の取組みを棚卸し、様々な視点、多様な意見の存在を知り、意見交換することで、これまでにない復興に対する新たな視点を獲得する場とする」と定め、テーマを「復興からイノベーションへ」としました。

## 【概要】

第2回ふくしま県民公開大学は、2018年1月

20日(土)13:00-16:10、とうほう・みんなの文化センター(福島市)大ホールを会場として、一般576人、生徒・学生123人 計699人を迎えて開催しました。

冒頭、福島県立医科大学 竹之下誠一理事長より挨拶を行い、引き続き文部科学省研究振興局長磯谷桂介様、福島県知事 内堀雅雄様のご挨拶をいただきました。その後、本学 谷川攻一副理事長より、放射線災害・医科学研究拠点の紹介と「復興学」とのつながり、ふくしま県民公開大学の位置づけについて解説。続いて、福島復興と活性化を目的にこれまで取組んできた具体的なアクションについて、福島県立磐城高等学校、ふたば未来学園、福島県立医科大学の3校の生徒、学生から発表を行いました。この発表に対して、招へいしたパネリストからコメントをいただいた後、新たな視点を模索し「これから」へと取組みを発展させていくために、会場の高校生、大学生とパネリストが意見交換をするという全体構成としました。

パネリストには、様々なものの見方、視点を提示でき、考え方や価値の多様性を示していただけた方々として

- ・小泉進次郎様(衆議院議員・自民党筆頭幹事)
- ・佐々木宏様(クリエイティブディレクター)
- ・宮田亮平様(東京藝術大学名誉教授)
- ・山崎直子様(宇宙飛行士)

の4人の方にご参加いただき、ファシリテーターを日本科学ジャーナリスト会議理事の小出重幸氏に務めていただきました。いずれの方も「多様性」を重視され、ご自身の関与する分野において「イノベーション」を積極的に仕掛け、取組んでおられる第一人者の方ばかりであり、高校生、大学生に強い刺激と気付きを与えていただけることを期待しての人選でした。また、放射線災害・医科学研究拠点の研究成果についても、会場入り口ホワイエにおいてポスター掲示し、来場した県民の

方々、高校生、大学生が閲覧できるエリアを設けることとしました。

### 【従来の取組みの発表】

福島県立磐城高等学校からは、企業の主催する映像作品の世界大会で、中学生・高校生部門の最高賞を受賞した放送委員会のメンバーが登壇しました。彼らは応募作品の制作過程において、映像表現や非言語コミュニケーションの難しさについて学び、世界の様々に言語の違う者同士のコミュニケーションにおいて行動や映像が共通言語として機能する可能性の高さを報告しました。

続くふたば未来学園は、自分たちの高校が立地している双葉郡を「課題先進地域」とし、震災・原発事故後、日本が抱える解決困難な課題に一足早く直面している地域であることを指摘。高校生活の3年間に段階を追って課題解決の道を探り、提言をまとめていく活動を紹介しました。この活動を通して「これまでの価値観を見直し、新しい生き方、社会の建設を目指すこと、主体性・協働力・創造性を高めながら、原子力災害からの復興を果たすグローバルリーダーとなることを目指す」ことが目的だったものの、取組みが目先の課題解決に限定されがちであり、考察した内容がグローバルな課題とリンクしづらい、といった問題も明らかになったと報告。今後は課題をもっと深く普遍的に捉えるため情報収集体制の強化、自分たちの考察をサポートする体制の強化など、視野を広げるための取組みを検討していることが発表されました。

最後に福島県立医科大学から、学生サークルFukushima WILLのメンバーが登壇しました。彼らは、災害医療対応のノウハウなどを救急医から学ぶなどの「備え」の活動と、福島の災害から得た教訓を県外の他の医科大学の学生に「伝える」活動の2つを活動の中心としてきたことを発表。

また、その活動の中で、医学部生が看護に関する実践知識がないために、被災傷病者の対応に苦労した経験を紹介し、災害医療対応の場面では、医学部生にとっても看護のノウハウの習得が重要であることが新たな発見であったことなどが報告されました。しかし、時間の経過と共に活動規模が徐々に縮小し、サークルの活動に関心を持つ学生が減っており、風化への対策が課題として挙げられました。



## 【パネリストと高校生、大学生のダイアログ】

ダイアログでは福島において「イノベーション」という言葉をどのように捉えているかを4人のパネリストにコメントいただくことからスタートしました。佐々木氏は、福島はいつまでも暗いイメージばかりではなく、そろそろ悲しい記憶をポジティブなパワーに切り替えていこうという視点が必要ではないかと指摘。宮田氏は古く中国の殷、周の時代の象形文字をととえに、自らの想像力を膨らますこと、自らが感じたことに自信を持って欲しいと訴えました。山崎氏は宮田氏のコメントを受けて、感性に訴える非言語コミュニケーションは相互の信頼関係の構築には欠かせないものとして、映像表現の難しさを発表した磐城高校の発表に共感を示しました。これらのコメントを受けて小泉氏からは、言葉でなくとも伝わることもあるが、一方で言葉でなければ伝わらないことがあることも意識して欲しいというメッセージも出されました。また、ふたば未来学園の発表の中で語られた「一人では変えられなくても、みんなで未来は変えられる」というフレーズに対し、一人であっても変えてやる、最後までやり通すという思いを持つ人がいてこそ、支えてくれる人も集まってくるものだ。行動を起こす最初から「みんなで変えよう」という気持ちでは日本にイノベーションは生まれない、という指摘がなされました。

その後は会場の高校生、大学生が自分なりに捉えた「イノベーション」に関する質問や、パネリストとの意見交換を行いました。最初の質問は、イノベーションを技術革新という面から捉えた高校生からのもので「近い将来、シンギュラリティ、つまりAIが人間の知能を超えた時、私たちはどう生きるべきか」という質問でした。また自らがイノベーションの担い手となることを意識した大学生からは、変化をもたらすための行動を起こす時の覚悟や心構えについて、さらに高校生からは、

自らの研鑽を積むためには一度は福島を出るべきかどうかといった質問も出されました。また、他の高校生から出された、復興していく、すなわち変化していく福島の魅力を発信することが大切だとしても、そもそも「魅力」とは一体何なのかが分からない、「魅力」とは何ですか？という少し哲学的な質問に対しては、会場から驚きの小さなどよめきが起きました。さらには、変革を起こすために他の人にはないクリエイティビティを身に着けるにはどうしたらよいのか、といった質問も出され、問題意識の高い質問にステージ上のパネリストの皆さんが答えを考え込む場面も見られました。

これらの質問に対し、パネリストの方々にはひとつひとつ丁寧に回答していただきました。そして、会場の高校生、大学生と繰り返しやりとりされた質疑応答の中から4人のパネリストの皆さんに共通するメッセージが炙り出されてきました。

それは、イノベーションを起こそうとも、福島の魅力を探そうとも、さらにクリエイティビティを身に着けようも、なにをするにしてもまず、自分自身と自身の思いを大切にすること、というものでした。

まず小泉氏から、多くの人が賛成するような変化はたいしたアイデアではない。何かを変えようとすれば必ずなんらかの反対にあうのは当然。変化が必要だと思うことに多くの反対を受けたとしても、何としても変えるんだという覚悟があって初めて身の回りに「同志」は集まってくるものだ、と政治家としての経験に基づいたお話をいただき、確固たる自信に裏打ちされた思いがなにより必要であること、イノベーション、変化を起こすことは決して楽ではないことを示しました。これを受けて宮田氏より、「自分を愛すること、誰よりも自分を好きであること」という表現を用いて、今日の自分より明日の自分がより素敵と思え



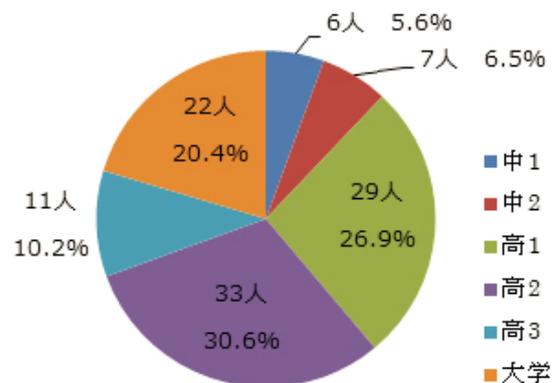
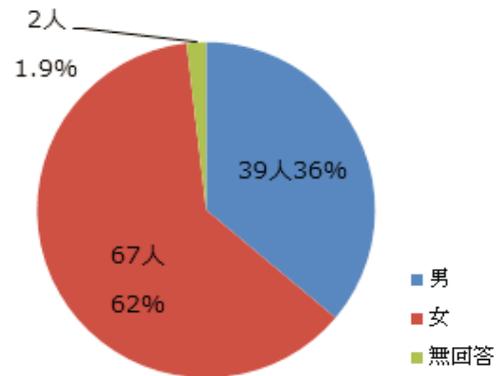
る生き方を模索することを提示されました。山崎氏は宮田氏のメッセージをさらに膨らませ「どういう未来を作ればよいのだろうと考えることが大切。未来は自分で作れるものだからこそ、自分の思い、考えが大切」とコメント。さらに、佐々木氏は物事を「犬の目、鳥の目、虫の目で見ようとしている」と自らの広告制作活動の時の姿勢を紹介。五感を研ぎ澄ました感性を磨くこと、俯瞰した視点で物事の位置づけや広さ、関係性を見つけること、微弱なシグナルやごく少数の見逃しがちな小さなメッセージをキャッチする力を養うこと、といったことに意識を持っていれば、多様な視点で自身の考えを追求できるのでは、とコメントされました。そのうえで、魅力について、ポジティブなことを殊更に誇示するよりも、自身のネガティブな面も分かっています、と自ら発信するほうが魅力を語る時の武器になることもある、という意見に多くの高校生、大学生がうなずいて応えていました。最後に小泉氏が、イノベーションに取り組むなら自由であることが重要。相手が望んでいるであろう答えを思いやって意見を言うのではなく、自分の思いを、たとえ一人であってもしっかり発言することが大切、と締めくくり、ダイアログは終了しました。

その後、広島大学原爆放射線医科学研究所所長松浦伸也教授、長崎大学原爆後障害医療研究所所長 宮崎泰司教授より、原爆の被害からの復興の足跡を紹介いただきながら、福島県立医科大学 大戸斉総括副学長からは、これからの福島の復興を担う高校生、大学生のエールを込めて、それぞれ閉会の挨拶をいただき、盛会のうちに第2回ふくしま県民公開大学は終了しました。

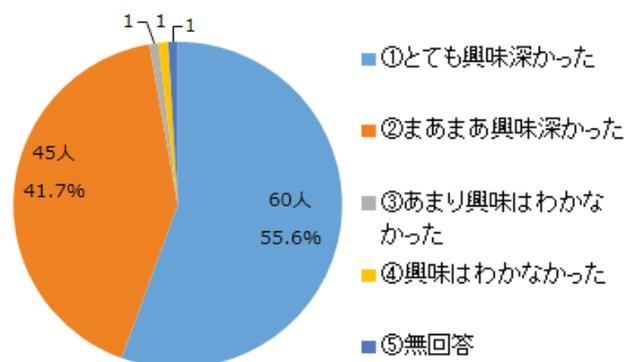
### 【まとめ】

事後のアンケート結果は以下の通りとなりました。(参加123人中回答108人 回答率88%)

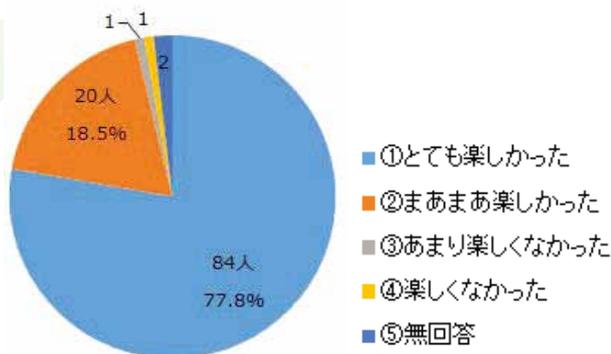
### ■フェイスシート



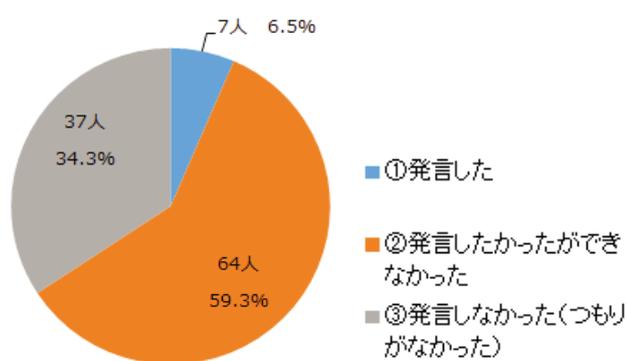
### 問1 高校生・大学生による発表の内容はいかがでしたか？



### 問2 後半のパネリスト皆さんによるダイアログの内容はいかがでしたか？



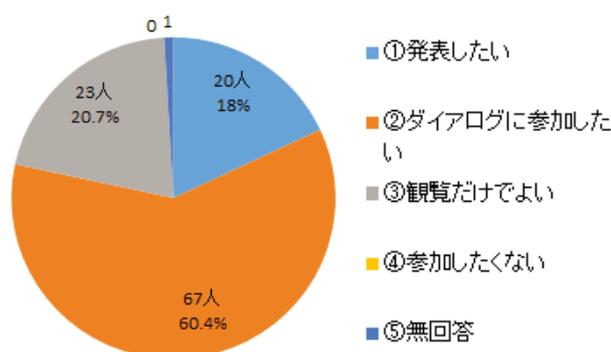
### 問3 ダイアログの中で発言しましたか？



発言したかったが出来なかった理由としては

- ・気おくれ 16人
- ・時間がなかった 16人
- ・質問内容がまとまらなかった、思いつかなかった 16人
- ・手を挙げたが指名されなかった 10人が挙げられました。

### 問5 次回、同じようなシンポジウムがあれば、どのように参加したいですか



自由記載欄では

「心に響くことが多く今まで悩んでいたことが吹き飛びました。」

「コミュニケーションについて、イノベーションについてのシンポジウムでこれから地域創生のプロジェクトをしていく人間として学ぶことが多くありとても有意義な時間となりました。」

「各界のトップを走っている人達だからこそ、私には計り知れない経験に基づくお話はとても衝撃で感銘を受けました。」

「色々な業界から4名の方がシンポジウムに参加していたので、1人1人違った視点から意見を聞くことができとても楽しかったです。また、自分の視野を広げたり、考え方を見直すことができたのでよかったです。」

「日本を代表する偉大な方々との意見交換を間近で聞くことができとても貴重な体験になった。福島の未来や日本の未来について少しずつ考えることができた。」

「普段なかなかお話を聞く機会がない方のお話を聞いてとても参考になりました。またパネリストの方が1人ではなく4人いらっしゃったので色々な意見が聞いて自分の考えも少しずつ生まれました。またこのような機会があったら是非参加させていただきたいです。」

といった記載が見られました。各ジャンルの第一人者の方々からのメッセージの斬新さやスケールの大きさに驚く参加者が多く、復興やこれからの福島における生活において、これまでにない視点の獲得や、様々な視点や多様な意見の存在に気づいてもらうという企画段階の目的に対しては一定の成果を収めたものと考えています。しかし、一方で、大規模なシンポジウムにしたことで、「多くの生徒、学生が意見や質問を言えないまま終わってしまった。せめて事前に参加者から、福島の未来についての意見を募り、予めパネリスト

の皆さんに見ておいていただけるような工夫はできなかつたか。」

「福島未来を担う当事者としての意識は持ったかもしれないが、じっくりと考えるまでには至らず、一過性のお祭りのように見えた。何か継続性を持たせるメッセージが必要だったのではないか。」

といった意見もいただきました。「もっと意見交換がしたかった」という声も多く、問題意識の共有はできたものの、参加者同士がこれからの復興の在り方についてじっくり考える、という場面まで持って行くことはできなかったことは最大の反省点となりました。今後のふくしま県民公開大学の課題としたいと思います。